



発行責任者：歯学部長 宮崎 隆，編集責任者：広報委員長 佐藤裕二
〒142-8555 東京都品川区旗の台1-5-8 TEL 03-3784-8000
ホームページ：<http://www.showa-u.ac.jp>

巻頭言 歯科薬理学 山田庄司



歯学部だより2004年最終号に当たり、この一年を振り返ってみると、歯科病院の診療科整備とそれに伴う改修、D3の新カリキュラム移行、四大学交流の発足など実にさまざまな出来事がありました。また、2006年の卒後研修の義務化、共用試験の本格実施、保健医療学部1年次の富士吉田移行に向けた準備が進められてきました。歯学部・歯科病院を取り巻く環境が厳しさを増す中で、まさに歯学部はターニングポイントにさしかかっています。人員が削減され、仕事量が増加するという厳しい状況にも関わらず、今年の国試現役合格率は29歯科大学中3位の好成績で、11月の推薦入学志願者も増加しました。歯学部は優れた人材に恵まれています。歯科病院診療科整備も進行し、来年には良い結果ができることを期待しています。

ところで、今年は相次ぐ台風の襲来や地震といった災害が多く、夏は記録的な猛暑でした。また、水戸偕楽園の梅が平年よりも49日早く開花しました。こうした異常気象のため、来春のスギ花粉量は多いと予想されています。スギ花粉は1月1日を起算日にして、毎日の最高気温の積算温度が350℃～400℃程度に達した頃に飛散が始まり、東京では2～4月に多くなりますが、前年の10～11月にかけて小量が飛散します。東邦大学の調べでは既に昨年同期の約20倍の飛散が観測されています。東京都では花粉症の罹患率が年々増加し、平成8年の段階で約20%に達しています。花粉症の方は早めの対策が必要でしょう。

第24回昭和歯学会例会 口腔衛生学 向井美恵

12月4日に歯科病院で開催されました。「新設診療科・診療部門紹介」で、総合診療歯科・長谷川科長、口腔リハビリテーション科・高橋科長により新設2科が紹介されました。本年9月新設の診療部門では、顎関節症科、インプラント科、美容歯科、障害者歯科について、古屋、倉知、真鍋、佐藤の各科長により積極的な取り組みの現状が紹介されました。また、本年2月開設の「お口の健康外来」について、松田幸子先生より現状と将来展望の発表がありました。細山田学長も出席され、今後期待する旨の感想を述べられました。

上条奨学賞の授与式が行われ、上条奨学賞 研究業績は「口腔扁平上皮癌の浸潤転移における分子病理学的解析」口腔病理学 立川哲彦教授が、研究補助は「レーザーの歯科保存学への応用」う蝕・歯内療法学 木村裕一助教授が受賞し、学長から表彰状と直筆色紙が授与されました。

19演題の口頭発表がなされ、活発な討論がされて予定時間を大幅に超過して散会となりました。



道健一名誉教授、歯科医学会会長賞受賞

本学の道健一名誉教授が、歯科医学・歯術の研究に成果を収め歯科医学・医療の向上に特に顕著な貢献があったと認められ、12月13日に、晴れある日本歯科医学会会長賞を受賞しました。当日は、理事の向井教授、評議員の久光、岡野、宮崎の各教授が授賞式に参列しました。



道先生は日本歯科薬物療法学会からの推薦で、長年日本の歯科薬物療法学発展の中心的役割を果たし、特に新薬承認の基盤になる各種薬剤の効果判定基準の制定と新GCPによる臨床試験に貢献したこと、また、歯科領域で初めて細胞培養の技術導入や口腔機能障害の評価法の確立による診断・治療への貢献が授賞の功績でした。

道先生は現在、東京医科歯科大学歯学教育システム研究センター客員教授として、共用試験のCBTで指導的な立場で、精力的に活躍されています。今後もお元気で後輩のご指導を宜しくお願い申し上げます。

歯科病院職場見学 歯科麻酔科 五島衣子

11月19日に私立富士見丘中学校3年5人が歯科病院で職場見学を行いました。私の姪の依頼から実現した、歯科病院初の中学生職場見学でした。川和病院長の挨拶のあと、佐藤教授、齋田看護士長、日山衛生士長、志賀課長、菱田課長からさまざまな職種、仕事の内容などの説明を受けました。

診療時間中で患者様も多く、診療室内の見学はあまりできませんでしたが、歯科医療最前線の雰囲気は彼女達を緊張させたようです。また矯正科外来の症例写真の前では、多くの質問がありました。技工室、薬局、AVセンターの見学では実際の業務を見ながら丁寧な説明を受け、医療に携わる多岐の仕事について学びました。

今回、短時間ではありますが医療現場を実際に見学し、さまざまな職種や仕事内容に触れたことは、漠然としていた“仕事”という言葉をも身近なものにしたようです。ご尽力いただきました皆様、突然の見学に快く説明して下さった皆様に深謝いたします。



OSCEワークショップ 昭和大学で開催

口腔外科学 角田左武郎

平成16年12月10-11日に、旗の台校舎で第3回歯学系OSCEワークショップが開催されました。このワークショップは、平成17年度から正式実施される共用試験OSCEに必要な標準評価者を育成するため、平成14年度から始まりました。14年度は2回、15年度は3回、そして今年度は3回、合計8回開催されました。毎回、共用試験参加28校から2名ずつ参加しているため、今回で514人が参加したことになります。昭和大学からはう蝕・歯内療法科の鈴木先生と歯科補綴科の塚崎先生が参加しました。

宮崎歯学部長の挨拶の後、1日目は13:00から19:30まで、2日目は8:45から15:30まで行われました。今回は、OSCE 27課題のうち診察・技能系17課題の中から4課題をワークショップで取り上げ、参加者がそのうち2課題を経験するように企画されました。複数の課題を経験するのは正式実施の際、評価者が自分の専門領域だけでなく、他の領域の評価にかかわるからです。今後、これら受講者は各地で開催されるトライアルで外部評価者として経験を積み、正式実施に備えることとなります。

今回の開催にあたり、病院が休日なのにもかかわらず準備・運営に協力いただいた歯学部OSCE委員会を中心としたワークショップ準備委員、およびステーション補助スタッフの皆様へ感謝致します。



研修医説明会 総合診療歯科 長谷川篤司

平成17年度臨床研修プログラムの説明会が開かれました。平成17年度臨床研修における大きな変更点は、①研修期間を従来の2年間から1年間とする。②全員を複合式研修方式とする。③専門診療科への所属をなくす。などであり、これらに対応して①歯科病院と従たる施設で各々の施設の特長を活かした研修内容を立案し、短期間でも充実した研修を実施する。特に、従たる施設では地域歯科保健活動に重点を置いた研修を実施する。②必修として7診療部門（口腔外科、麻酔科、小児歯科、高齢者歯科、歯科放射線科、歯科矯正科、旗の台病院歯科室）、選択として最大5診療部門（口腔リハ科、インプラント科、顎関節症科、障害者歯科、美容歯科、藤が丘病院歯科室、烏山病院歯科室から選択）と幅広い診療部門で研修できる。③15～18名毎に担任指導医と若手の研修協力医を配置して「屋根瓦方式」のきめ細かい研修を実施する。など、魅力的な研修案を解説しました。また、研修方略としては自己問題解決を基本とし、日々の学習成果としてポートフォリオの作成が強調されました。会場には父兄に同席して卒業生も散見され、皆、真剣に聞き入っていました。

北米神経科学会 (Neuroscience 2004) に参加して

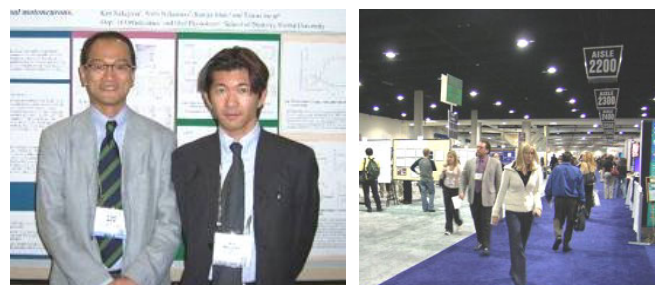
口腔生理学 井上富雄

Neuroscience 2004が10月23-27日まで米国サンディエゴで開催され、矯正科大学院生の中島還君と参加しました。米国のSociety for Neuroscienceの年次大会で、解剖学、生理学、薬理学を含めた神経科学に関するテーマを扱い、この分野で世界最大の学会です。会員数は、年々増加の一途をたどり、現在は35000人を越えています。今年の本学会参加者は約30000人で、演題数も16000題となりました。これだけの規模の学会を開催できる学会場とホテルを持つ都市は全米でも限られており、最近ではサンディエゴ、ニューヨーク、マイアミ、ワシントンDCのいずれかで開かれることがほとんどです。また、ホテルと学会場との交通手段も大変で、今年は13系統もの無料のシャトルバスが、1日中10分～20分間隔でホテルと学会場の間を行き来しました。当然初日の朝は大渋滞で、学会場まで徒歩10分弱のところまでバスが止まってしまい、そこから学会場まで歩く羽目になりました。

ポスター発表が主で、その会場は昭和大学病院の敷地全部が入る広さですから、端から端まで歩くのには骨が折れます。カナダはもちろんヨーロッパからの参加者もありますので、私の研究領域（咀嚼運動制御の神経機構）の主だった研究者と会って話ができます。有名な学者ほど厳しいコメントをくれることが多く、説明にしどろもどろになってしまうこともあります。しかし、論文を書くときには当然そのコメントの対応が役に立つわけですから、わざわざ来た甲斐があったというわけです。初めて会う科学者も多く、「あなたの論文はよく読んでいますが、お会いするのは初めてですね」と握手を交わすことができるのも国際学会参加の楽しみの一つです。また、自分の専門外の領域でも、ちょっと足を伸ばせば世界の一流の科学者による最新の知識を得ることができます。

さてここまで読まれた方はお気づきかと思いますが、この学会の最大の欠点は規模が大きすぎることです。私が始めて参加したところ（1991年）は、参加者が16000人を越えた程度で、ぶらぶら歩いてポスターを見てもまだ何とかかなりでしたが、最近の規模では全く不可能です。そこで、学会側は事前に抄録集の代わりに検索機能付きのCD-ROMを配り、著者・キーワードなどで見たい演題を検索して登録すれば、最終的に何日の何時にはこの演題を見に行きなさいというitinerary（旅行日程表）を自動的に作ってくれる工夫をしています。

ところで、ふと今年気づいたのですが、この様な大規模な学会の無数のポスターを見て回っているのは、自分の実験室で脳に電極を刺して無数に存在するニューロンの一つから活動を記録し、脳の機能を探ろうと悪戦苦闘をしているのとそっくりですね。



Elective study(選択学習)報告

齶蝕・歯内治療学 東光照夫

選択学習(Elective Study)とは、多様な教科・科目を用意し、学生自らが興味・関心に応じて選択学習を進める方法です。本学部でも、6年次に海外も含めた学内外で行うことが計画されています。

2004年8月2日から18日の間、英国リバプール大学歯学部学生2名が、選択学習のために昭和大学歯学部を訪れました。リバプール大学と本学は、一昨年岡野教育委員長がPBL視察に訪れて以来、交流を持っています。最終学年のダラムピア・シン君、アントニー・ホーソンさんは、日本における歯の漂白法の普及、歯学部での漂白法の教育に関心を持ち、これをイギリスと比較することを選択学習の目標としています。本学の担当は、岡野教授、久光教授と、漂白を行っている齶蝕歯内治療学の東光、星野、西村その他医局員でした。

8月5、6、12、13日に漂白の講義と実習、11日に放射線CT機器に関する講義が行われました。その間、宮崎歯学部長と面談、校舎と病院見学、6、12日には東京医科歯科大学の訪問、7日には富士吉田校舎見学、10日に審美歯科医見学、16日にはメーカー研究室見学を行いました。11日には昭和歯学会の主催で、「リバプール大学でのPBLの現況」についてのセミナーを開催し多数の聴取を集めました。また医局員を交えた歓迎会、交歓会、富士への旅行、TDL、オペラ鑑賞、名所観光などなど、学習以外の活動も実に多彩でした。

今回のリバプール学生の受け入れは、歯学部として初めて国外からの選択学習の実施でした。講義や実習の内容は急遽作成したもので、不備や準備不足もありました。しかし彼らは猛暑のなかきわめて熱心に紳士的に礼儀正しく学習し、当初の目的について知識が深まったと感想を述べてくれました。

国外からの学生受け入れは、国際交流センターをはじめ職員の皆様方の多大な協力があって初めて可能です。各部署の密接な連携の重要性を強く感じました。同時に、学部教員は国際的に学生を受け入れるために、英語で講義を行うことができ、その準備を十分に整えておく必要性を痛感しました。本学部学生が、国外施設に選択学習に行く際は、語学はもちろん明確な学習目的と礼儀正しい態度が学習成果を上げるのに必須と思われました。



ダラムピア・シン君
アントニー・ホーソンさん 松本教授からレーザーの説明

行事予定

広報委員長 佐藤裕二

- 1月 4日(火)：仕事始め
- 1月15-16日：センター試験
- 1月25日(火)：医療安全講習会(歯科病院)
- 1月29日(土)：選抜Ⅰ期・センター試験併用入試
- 2月19日(土)：大学院Ⅱ期入試
- 2月21日(月)：臨床研修医出願締切
- 2月25日(土)：臨床研修医選考

留学生生活を振り返って 小児歯科学 二雪岩

私は小児成育歯科学教室にて佐々龍二教授のご指導のもと、外国人研修生として2004年7月から、6ヶ月間の研修を受けました。実は昨年4月からの1年間を笹川奨学金の研究生として小児成育歯科学教室に留学しており、今回を合わせると1年半をこちらの教室でお世話になりました。

留学生生活を振り返ると、一番印象深かったことは佐々教授をはじめ、先生方が医局の仲間として私を迎え入れたことで、いつも明るい雰囲気でご過ごすことができたことでした。交通手段の発達により日本と中国との距離感は近いとはいえ、それぞれの文化、食生活、考え方などは異なります。しかし、先生方のお心遣いのご指導のおかげで勉強に専念でき、一年半の留学生生活を豊かで充実したものにできました。

私は小児歯科の診療内容やそのシステムについて学び、研究では伊田先生と伴に小児の口腔内の歯周病原性細菌について昭和歯学会雑誌に論文発表ができました。さらに、歯周治療学教室の鈴木助教授、歯学部長の宮崎教授、口腔微生物学教室の五十嵐教授、口腔衛生学教室の向井教授、及び若い先生方と交流が持て、とてもよい関係を築くことができました。

私にとってこの研修期間は短いものでしたが、日本で得た経験は人生で最も貴重な財産と信じています。今後は、日本で学んだことを活かして昭和大学との共同研究を続け、中国の歯科医療の向上と発展に努め、さらに中国と日本における国際交流に貢献したいと考えています。

最後に、留学期間中に大変お世話になりました佐々教授、医局の先生方、国際交流センターならびに友人に、多大なご支援と御指導を頂いたことを心から感謝いたします。さようなら、きれいな日本、さようなら、素晴らしい昭和大学、さようなら、昭和の優しい先生方、さようなら尊敬する佐々教授。



ボウリング大会 歯科病院管理課 志賀耕二

平成16年12月3日 五反田で、教職員福利厚生の一環として恒例のボウリング大会が開催されました。100名を超える教職員が参加し、和やか雰囲気の中熱戦が展開されました。川和病院長より各賞受賞者の栄誉が讃えられるとともに賞品が贈呈されました。

優勝	中納治久(矯正科)	五十嵐真紀(医事課)
2位	岩崎信雄(サライ)	村田久子(医事課)
3位	吉本新一郎(小児歯科)	各務友美(医事課)



大連医科大学から新留学生として 張先生が来日

歯科補綴学 胡書海

去年9月に本学部と大連医科大学歯学部間の交換プロジェクトが締結され、今年10月にこのプロジェクトによる外国人研修生として張虹先生を迎えることになりました。張先生は1984年8月に中国白求恩医科大学歯学部を卒業し、同年9月から現在まで大連医科大学第一附属病院口腔科に勤めています。2001年8月に教授に昇任し、主に口腔粘膜病変の基礎及び臨床研究をされています。また、張先生は中国中華医学会口腔粘膜病學組委員、中国遼寧省口腔医学会高齢者学会副主任委員などの役職を担当しています。今回、久光教授の下で5ヶ月間歯科保存修復の一般臨床及び変色歯の漂白について研修する予定です。

大連医科大学歯学部は本学部より8年遅れの1985年に創立され、2003年には現代的な技工理論と技術を持つ高級技工士の養成を目標として、中国国内で初めて5年制学部レベルの口腔技工工藝學専攻が設立され、来年には創立20周年を迎えます。

11月22日に宮崎歯学部長、川和病院長ほか指導教授と中国からの留学生有志が集まり、張先生の歓迎会を開催し、大いに親交を深めました。



歯学部同窓会理事忘年会

理事 瀬沼壽尉

12月8日、同窓会理事の忘年会が行われました。本年度は、神田にある「ベルギー料理&ベルギービールの店Champ de Soleil」にて、飯島会長含め、平日にもかかわらず多数の参加となりました。歯学部から宮崎歯学部長（歯科理工学教室教授）と、本年度10月着任の五十嵐教授（口腔微生物学教室）も参加され、さらに厳しくなる歯科業界を生きぬくために、昭和大学歯学部と同窓会が密な連携をとることを話しあいました。研修機関への受け入れ態勢や患者さんの紹介、歯学部と同窓会学術講演会の連携、同窓生の昭和歯学会への参加など各期の理事からの質問や提案、要望がとびかいは話はずみで、ベルギービールのおいしさのせいもあり、長時間にわたる非常に内容の濃い忘年会でした。



父兄会秋期部会

学部長 宮崎 隆

11月27日に恒例の父兄会秋季部会が旗の台校舎で開催されました。今回は正式の歯学部会（午後2時開始）の前に、6年生の父兄約60名を対象に、卒業までの卒前教育と卒後の進路等に関する説明会を開催しました。学部長の挨拶のあと、岡野教育委員長が卒業までのカリキュラムと卒業判定について、上條D6チューター会議議長がチューターシステムについて、立川学生部長が卒業までの生活管理と国家試験について説明しました。卒業後の進路については学生だけでなく父兄の関心も高く、立川大学院運営委員長が今年度開始の大学院社会人特別選抜について、主旨や研究分野、単位の取得等について詳細な説明を行いました。

引き続き、今年度から正式に設置された総合診療歯科の長谷川科長が、平成17年度の卒業研修プログラムについて、研修期間が1年になること、歯科病院と学外施設を併用すること、歯科病院内では必修7科、選択最大5科の研修で幅広い経験ができることなどを紹介しました。

正式の歯学部部会には、2～6年生までの父兄約170名が出席しました。学部長から歯学部の現状と中長期の目標について、岡野教育委員長から新カリキュラム、共用試験、および国家試験について、立川学生部長から学生の課外活動、健康管理、そして最近マスコミをにぎわしている振り込め詐欺等の注意がありました。部会終了後、各指導担任との個人面談を行いました。50周年記念館で開催された懇親会には4学部の父兄約500名が参加し、父兄同士また教員との懇親を深めました。



診療統計（平成16年11月分）

区分	患者数	1日平均	前月1日平均	前年1日平均
外来患者	16417	781.8	702.9	713.3
入院患者	504	16.8	14.1	18.1

編集後記

広報委員 高見正道（口腔生化学）

年末の忙しい時期に原稿を準備してくださった皆様にこの場を借りて深く御礼申し上げます。編集していてわかったことは、歯学部の先生方が積極的に学際的な活動を展開していらっしゃることでした。

来年からは私も微力ながら、少しでも貢献できるよう努力したいと思います。